

# 深作欣二監督作品

賭けを恐れて、挑戦はありえない!

三岡三津金大藤加安中茂御永梅青中織遠丹  
松田田田子滝岡藤井谷山本井津木原本藤源  
敏栄佳伸信秀琢 昌一千伸秀 義早順太哲  
莉子子介雄治也嘉二郎郎介明栄朗苗吉郎郎

夏橋中宮和寺峰藤田成佐島若江原近西森波松千萬  
樹 村内崎田岸卷村田藤 林道田藤郷田瀬方葉屋  
陽麻光 俊 三佑英 香美正輝健恒弘真錦之  
子紀輝洋哉農徹潤亮夫夫豪子子臣彦作彦樹一介

萬屋錦之介主演

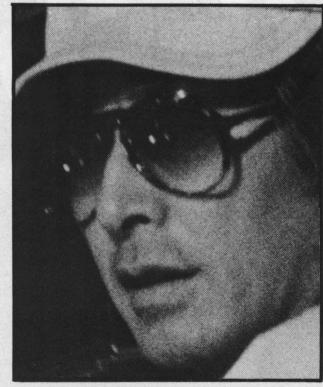
# 赤穂城断絶



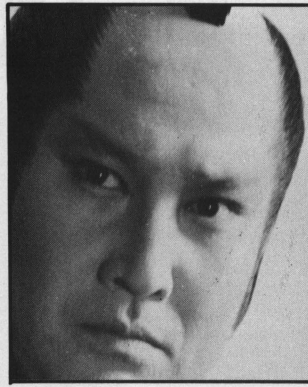
■あこうじょうだんぜつ(カラー超大作)



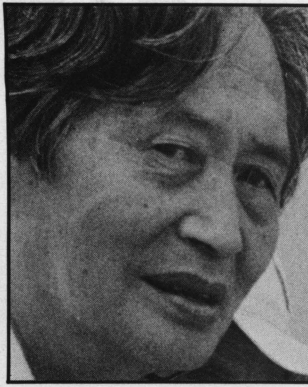
製作 ■ 東映株式会社  
■ 東映太秦映画村



深作欣二<監督>



萬屋錦之介<主演>



宮島義勇<撮影>

企画 ■ 高岩 淡  
■ 日下部 五朗  
■ 本田 達男  
■ 三村 敬三

## ● 日本映画を代表する3人の熱いディスカッションが生む話題の傑作!

### ● かいせつ

若い映画ファンの間で、いま最もその活躍を期待され注目されている深作欣二監督が、萬屋錦之介(主演)、宮島義勇(撮影)とトリオを組んで挑む話題の時代劇超大作。日本人にとって民族の大ロマンとして語り継がれ、小説・演劇・映画など多くのジャンルで数々の名作を生んできた「忠臣蔵」のあまりにも有名な物語遺産を題材として、現代の俊英・深作が、古典作品をどう今日のヴィジュアルで感覚で魅えらせるか、興味の一点はこゝに絞られる。赤穂事件以来、270年の間、仇討ち美談あるいは感動的な義士物語として、ひたすら美化され確固たるイメージを打ち立ててきたこの題材。いわば壮大な民族的遺産へのダイナミックな深作監督の挑戦である。

従って今回、忠臣蔵25本目の映画化として製作されるこの作品は従来の美談調とは趣きを一変。幕府権力が浅野家を取り潰した「赤穂城断絶」に始まる戦いのロマンに焦点を絞り、実録忠臣蔵の名にふさわしく、これまで謎とされてきた部分に新たなスポットを当て、埋もれていた興味深い事実を掘り起こし、斬新そのもの、時代ドラマを組み立て、いる。

### 赤穂は燃えてござる!

### われらは幕府権力に敵をみた

元禄十四年三月十四日、泰平の世を揺るがして突如、起つた赤穂事件  
幕府への反逆630日を彩る戦いの人々!

※抗の声をあげたものはなかった。その中で、赤穂四十七士といわれる人々が、始めて戦いを挑んだのである。

彼らを戦いに駆りたてたものは何か? 亡君への忠義か? それもあるが、私には、もっとやむにやまれぬ人間としての意地(誇り)といつてもよい。ゆえの戦いだったと思う。一家中を苦界につき落した当の敵がそこにいるのに、一矢もむくいずには尻尾を巻いたとあつては、末代子々孫々にまで顔むけがならない。

この一念にこりかたまって、肉親との絆を断ち、死にもの狂いに突込んでいった彼らのありようは、今でも我々の心を打つ迫力に満ちている。それはまたなぜか?

我々は皆、己れの過去に戦いの歴史をもっている。人間らしくありたいと願う意地を、しばしばねじ伏せようとする現実との戦いの歴史を。

そして不幸なことに、その多くは、敗北と屈辱の記録で満たされている。

そこで我々は夢みる。意地を貫く戦いのロマンを。そして、赤穂浪士の物語ほど、この条件に叶っているロマンはない。彼ら四十七士が時代を超えて民衆の支持を受けてきた理由はここにあり。民衆はその忠義を称えたのではない。彼ら

◀元禄時代、圧倒的な権勢を誇った五代將軍綱吉が、彼一代の間に取り潰した大名は実に四十八家。そのため生活をつたつた武士の数は三万余人に達したが、誰ひとりとして反抗する者がなかったという。だがその中で初めて幕府に戦いを挑んだのが大石内蔵助以下赤穂浪士四十七人。文字通り人間としての意地、誇りゆえの壮絶な戦いでいる。

そして、一方これまで見落されていた幕府側、吉良方の動きを刻明に描き、討つが武士道なら、討たざるも武士の心意気という当時の侍思想にのつとつた緊迫感あふれるドラマを狙っているのも異色。また事変発生から切腹に至るまで、四十七士の行動をつぶさに捉え、その頂点に立つて、壮大な仇討劇の演出家、として動く大石内蔵助のユニークな人物像を鮮やかに描破している。

### ● 演出意図 || 深作欣二(監督)

「どんな〈忠臣蔵〉を作るつもりかとよく聞かれるが、私が作りたいのは忠臣蔵ではなく「赤穂城断絶」に始まる、戦いのロマン」なのだ。元禄時代、五代將軍綱吉は圧倒的な権勢を誇り、彼一代の間に取り潰した大名は四十八家、そのための生活をつたつた武士の数は、三万余人に達したが、誰一人反

### 深作欣二監督作品へカラー超大作

# 赤穂城断絶

の意地ゆえの戦いこそ、民衆は支持し、声援し、その勝利に涙したのである。

私は思う。赤穂四十七士にとって、吉良邸襲撃は一つの賭けであった。彼らは敢えてその賭けに挑み、見事に勝った。賭けを拒否しては彼らの戦い自体がなりたらず、したがって彼らの勝利もなかったといえる。

### ● 超一流のスタッフ・キャスト結集

大ヒット作「柳生一族の陰謀」に次いで、時代劇の伝統が鮮烈に息づく東映京都撮影所の時代劇超エキスパートを総動員、しかも撮影監督に、日本映画が誇る大ベテラン宮島義勇を迎えてのベスト・スタッフ。またキャストも、萬屋錦之介、三船敏郎をはじめ未曾有の豪華版。誰がどの役を演じるのか、ファンの期待と楽しみは頂点に達している。

### ● ラストの討入りと圧巻の切腹シーン

赤穂浪士の吉良邸討入りシーンは、ラストのほぼ20分余を費やして、壮絶きわまりないリアルな殺陣をくりひろげる。そのあと大石内蔵助はじめ四十七士の切腹シーンが、万感こめて削りあげられる悲愴美。動と静のくっきりした対照による圧巻のドラマ・パワー。恐らく日本映画史に新しい一頁を加える大ラストシーンとして、永くファンの胸に残ることだろう。